

仙台七夕まつりで石巻をPR

去る 8 月 6 日から 8 日まで、東北を代表する祭りの一つ「仙台七夕まつり」が例年通り開催されました。今年は仙台商工会議所から参加の打診があり、「私たち石巻専修大学の学生らも、石巻を PR しました。

私たちのブースは定禅寺通りの中央分離帯に設置された「石巻復興応援ブース」と名付けられたテントでした（指導：清水義春特任教授）。

この中で私たち丸岡ゼミでは、石巻の復興の様子を伝え、支倉常長に関連する展示をしました。1613 年、支倉常長は現在の石巻市から出帆したとされており、今年ちょうど 400 年の節目です。また今年の 6 月 19 日に「慶長遣欧使節関連資料」がユネスコの世界記憶遺産に登録されたことで、さらに注目が集まっています。

私たちの展示物は、高橋智准教授（理工学部）と益満環准教授（経営学部）ゼミが製作した、帆の表裏の絵が入れ替わる「板返し」を備えたサン・ファン号の模型、支倉常長らの肖像画と説明文、支倉常長のヨーロッパまでの航路、サン・ファン・パウティスタ号が石巻内での建造地の論争の紹介などのパネル、支倉常長をモデルにしたからくり人形などです。慶長使節が江戸時代の出来事なので、この時代の技術での展示物を考えました。

石巻専修大学の学生や、石巻にあるサン・ファン館の職員の方々などが参加して、ブースの運営を行いました。

私たちは、訪れた方々に、短冊に願い事を書いてもらう担当でした。この短冊は、一枚の大きな絵を小さく切り取って出来たもので、これを元の順番で張り合わせていくと、再び一枚の大きな絵が完成する仕掛けになっています。この「石巻復興応援短冊」は絵 1 枚につき総数 300 枚以上の短冊からなる大掛かりなもので、訪れた方々に願い事を書いてもらって完成します。

図柄は、1 日目は石巻の名所の写真を組み合わせ中央に「復興」の文字を配した図、2 日目は庄子真岐准教授



パネル「支倉常長」「フェリペ 2 世」「パウロ 5 世」



表…石巻街なかマップ



裏…数々の願い事

ゼミ製作の石巻街なかマップ、3 日目は石ノ森章太郎作「サイボーグ 009」の島村ジョーの図柄となっていました（協力：石ノ森萬画館）。

図柄の完成の為、私たちは、連日ブース前で呼び込みを行いました。七夕には連日約 60 万人もの人出があったそうです。初日夕方は雨で人出が減ったため、私たちのパネルの図柄は 8 割程度の完成でした。が、2 日目 3 日目は猛暑の中の呼び込みの成果もあり、多くの方々の協力で大きな絵を完成できました。

この活動は、初日の雨の中でも東北地方の民放テレビ局（東北放送）と仙台の FM ラジオ局（RADIO 3）の生放送で取り上げられました。その意味で、予想よりも多くの方に石巻の復興とサン・ファン出帆 400 年をアピール出来たのではないかと私は思います。

2 日目以降は、猛暑のためか、足を止めて私たちのパネルを見てくださる方は余り多くありませんでした。しかし長時間解説を読んでくださる方もあり、そういった方々には私たち自身の言葉でより詳しく説明することが出来たと思います。

この仙台七夕まつりへの参加を通して感じたのは、今でも多くの方々が、石巻をはじめとする被災地の事を思ってくださっているということです。まず、短冊への願い事を見てみると、石巻や被災地の復興を書いてくださった方が多かったようです。また、ブースを訪れた方々とお話すると、震災時の様子や被災地のこれからの事などについて質問してくださる方が多くいたことからそれを感じました。

そういった方々に対して、この『石巻復興 NEWS』はもちろん、今回の仙台七夕まつりのようなイベントなどの様々な機会を通じて、石巻をはじめとする被災地の現状を発信し続けていきたいと私は思います。

（内海善樹）



板返しの帆を備えたサン・ファン号

中国の温州大 学生が来石

去る8月2日、中国の温州大学から8名の学生が来石し、石巻専修大学学生と同大学教員の案内のもと



被災地石巻の視察を行いました。今回の視察では石巻市の被災状況を伝え、震災復興関連資源の観光への展開可能性について中国の学生の率直な印象を聞きました。

私たちがバスへ乗り込むと、「こんにちは」「おはようございます」とほほえみながら挨拶してくれました。

まず一行は日和山へと向かいました。庄子先生、丸岡先生の説明を受け、石巻市で被害が大きかった門脇・南浜地区を一望しました。中国人学生は、ここで400人が亡くなったのが信じられないという表情でした。

中瀬を眺めた後、門脇小学校前へ移動しました。ここで石巻専修大学輪田准教授の通訳を通して私（金津）が震災の体験談を話しました。自分の失敗経験から、震災時の家族での集合場所や連絡手段を帰国したら家族で話し合ってほしいと伝えました。皆真剣な眼差しで話を聞いてくれたので、とても話し甲斐がありました。

中国では洪水などの被害が多発しているため、震災の意識は高く、地震を想定した訓練も年2回行っているというときは驚きました。特に今回この視察に参加した中国の学生は防災意識が高いと感じました。

その後、仮設商店街「石巻まちなか復興マルシェ」で昼食をとりました。この頃にはだいたい中国の学生とも打ち解け、ジェスチャーを交えて主に英語でコンタクトをとりました。私の拙い英語にも必死に耳を傾け理解しようとしてくれる姿勢に感激しながら交流も深めました。

昼食後、魚町（さかなまち）の大興水産株式会社へと向かいました。社員の方の説明のもと、屋上へと向かい避難階段や備蓄の説明を受けました。この会社社屋は石巻で津波避難ビル第一号に認定されました。屋外に一階から屋上へと続く非常階段が設置されており、その外壁は太い鉄パイプで覆われています。これは津波による漂流物から人を守る設備です。最大1000人の収容が可能で、ベッド、車イス、衛星電話なども常備しています。

その後、工場も見学しました。工場の中はとても寒く、中国の学生は魚を保存するための大容量の冷凍庫から流れる冷気に大興奮の様子でした。

大学へ戻るバスの中では、石巻専修大学の中川くんが被災体験を語りました。私とはまた違った震災当時の状況に中国人学生は真剣に話を聞いていました。

自然災害というものには、どの国にも共通の部分があります。今回のような国際交流により、互いの防災意識を高めていくことが大切だと感じました。

（金津甲樹）

ロシア・東京・石巻合同の震災学習

8月22日、ロシアの大学生（同行日本人大学生）39名と東京のボーイスカウト10名が石巻専修大学に来ました。それぞれ(社)石巻青年会議所、(社)石巻市社会福祉協議会から本学に依頼があり、同一日程だったため合同での学習機会を設けたものです。その模様は同日夜、NHK仙台放送局の「てれまさむね」で報道されました。本学のほか、(一社)みらいサポート石巻も学習に協力しました。

一同が集まった教室では、まず、石巻専修大学の四年生の私（金津）が地震や津波の体験談、震災から学んだ事を話してくれました。同行してきたロシア人のアナスタシア先生が通訳をしてくださり、ロシアの大学生達は真剣な眼差しで話を聞いていました。

次に震災時、湊第二小学校の教頭先生だった佐藤茂久さんから当時の小学校の様子を写真や図などを用いて説明してくれました。佐藤さんの講話に驚き、不安な表情を浮かべている人が何人もいました。

昼食後、ロシアの大学生と東京のボーイスカウトは、それぞれ分かれて石巻の視察を行いました。

ロシアからの一行は佐藤さんの案内で、津波の被害が甚大だった門脇小学校に向かいました。門脇小学校にたどり着くと、改めて津波の被害が大きかったと理解し、驚きの顔を隠せない様子でした。

その後、一行の希望により、石ノ森漫画館の隣にあるハリストス正教会に行きました（丸岡教授案内）。この教会は日本に現存する最古の木造建築教会ですが、東日本大震災により津波の被害を受け、現在は修復工事を行っている最中です。この教会を見たロシアの大学生は写真を撮影しながら、歴史を感じている様子でした。

東京のボーイスカウト一行は、84名が犠牲となった大川小学校へと向かいました（清水義春特任教授・金津同行）。校舎の変わり果てた姿に声も出ない様子でした。

その後、雄勝を経由し庁舎を眺めた後、女川へ向かいました。横倒しになったビルや町立病院からの眺めから津波がもたらした「現実」を受けとめていました。帰りの車中では実際に目で見たことで震災の悲惨さが伝わった、今日見たことを家族や友達に話したいと語ってくれました。

それぞれの視察終了後、石巻専修大学で意見交換会が行われました。視察して学んだ事を各団体の代表一人が話しました。どちらの方も地震や津波に対する恐怖の実感、震災の教訓、そして、東日本大震災を風化させない事の重要性を知ったと話してくれました。私は彼らが視察を通して学んだ経験を生かし、身の回りの人々にこれらの事を伝えていってほしいと願っています。

（金津甲樹、久道溪）

修理中でシートに覆われたハリストス正教会（道路右）を視察するロシア人と同行日本人の一行。左奥は石ノ森萬画館。



日和山での記念写真